

講演記録より

NHKで『バリバラ』という番組の制作統括をしています森下と申します。本日はよろしくお願ひいたします。レギュラー出演者は、ラジオDJをしてこられた山本シュウさん、パラリピアンで義足アスリートである大西瞳さん、バリバラの御意見番で脳性まひのある玉木幸則さん、多発性硬化症という難病で、24時間、呼吸器を使いながら、現在はアメリカで留學生活をしている大橋ノアさん、捻曲性骨異形成症という難病で、同じく24時間介助が必要な東佳実さんなど、一癖も二癖もある(?)人たちらです。ナレーションは、個性派俳優として活躍され、言語に障害のある神戸(かんべ)浩さんです。視聴率はリアルタイムで1%程度のマイナーな番組ですが、その分、自由にいろいろやらせていただいております。

私自身、現在の立場になってからは、現場に出向くことも少なくなってしまう、日常的に子ども達と関わりをもっておられる先生方、御家族、地域住民のみなさん、それぞれの方々に、高い所からお話しできる立場ではございませんが、改めましてどうぞよろしくお願ひいたします。

今回、このような貴重な機会にお招きいただき、これまでの先生方の発表をお聞きしていて、「主体的に幸せに生きるための力」というものをテーマに掲げられてきたことは非常に共感できることであります。私達も「何のためにこの仕事をしているのだろうか」ということを考えるときに、「誰もが自分らしく幸せを追求していくことのできる」、そのような社会を目指して、微力であれ番組を制作しているのだと、繰り返し確認してきました。向日が丘支援学校の皆様とも同じような方向性をもって取り組んできたのだと感じています。

番組制作に携わりながら、障害のある人が“自分らしく”生きる事を難しくしている“バリア”とは何だろうと、いつも考えています。「自分らしく生きたい」、「私はこんな風に生きたい」、そのようなことを思っても、家と学校と施設と病院を行き来するだけの生活をしてきた人たちにとっては、何かを選び取るための知識や経験が、そもそも不足しているかもしれない。「自分はこうしたい」と思うことがあっても、どうやって伝えればよいのか、その術が身に付いていないかもしれない。それでは、なかなか「自分らしく生きる」ということに近づいていくことは難しいのではないのでしょうか。先程の報告で、ICTの活用など、テクノロジーに関する研究発表もありましたが、これから上手くツールを用いていくことで、障害者が直面しているバリアもどんどんと下がっていくのかもしれない。本日の報告会でお聞かせいただいた取組は、大変参考となる事例ばかりでした。

まず最初に、バリバラの制作スタンスをお伝えしようと思います。もともと番組開始当初からのコンセプトとして、「障害者の障害者による障害者のための番組」というのがあります。それまでの福祉番組は、障害者が頑張る姿をとおして、視聴者に感動を与えようとするものだったり、障害者と周囲の人たちの愛情や絆を描くものが多かったように思われます。「しかし、それは、いったい誰に見せるために作られた番組なの？」と問うたとき、もしかしたら“健常者に対して感動を与えるため”の番組だったの

ではないか？「障害者のための番組」には、なっていなかったのではないか？その問い直しがバリバラのスタートでした。

バリバラの企画に『SHOW1グランプリ』という、障害者などマイノリティー当事者によるお笑い企画があります。ここでは、出演者は、自らの障害を「ネタ」にするなどして、見ている人たちに自分たちの障害特性や自分たちが日々ぶつかっている社会のバリアを気づかせていきます。もちろん、「障害者を笑う」では差別を助長することになってしまいます。「障害者とともに笑う」つまり、ネタを作るのも演じるのも、マイノリティー当事者というスタンスで初めて成立する企画なのです。それをマジョリティー（視聴者）が見たとき、どのようにリアクションすればいいのかという座りの悪さを感じる方もおられるかもしれません。一緒に笑おうにも、一緒に生きているリアリティーがないのだから当然の反応です。しかしながら、こうした視聴経験をとおして、この社会のバリアを築いているのは自分たちかもしれない、無意識に差別しているかもしれない、と気付いてくれる人が少しでも出てくるのが大事なのだと思っています。

「愛と感動」についてもひと言。そもそも番組制作者はより多くの視聴者に番組を見てもらうことを優先的に考えがちです。視聴率が広告収入に直結する民放だけでなく、NHK でも、こうした傾向は小さくありません。しかし、「より多くの視聴者」とは、マジョリティーである健常者を念頭において制作するというに、ほかなりません。すると、勢い、「愛」や「感動」を与える物語を量産してしまうことにもなりかねないのです。「障害者の障害者による障害者のための番組」とは、こうした視点を排除して、問題の本質はどこにあるのか、ということ当事者の視点でから考えるということなのです。

2016年の夏には、『笑いは地球を救う』と題して、民放の大チャリティー番組のウラで生放送を行いました。番組の目指すところ、制作形態、そもそも番組の規模が全然違うわけですから、先方を批判したり、敵対したりすることが目的ではありません。しかし、どうしても言わなければならないことは伝えようと思いました。それは、「障害者の描き方」「描かれ方」について正面から考えてみようということです。具体的に言うと、本当は、ものすごくバリアがある社会なのに、それをあたかもないかのように描いてしまう。もっと言うと、障害者が、「自分に貼り付いている障害」を乗り越える姿を描くことで、健常者を無邪気に感動させるものになっていないか、ということです。

番組の中では、2014年に亡くなったオーストラリア人の女性コメディアンであるステラ・ヤングさんのプレゼンテーションを放送。障害者が描かれるとき、健常者が自分より下がいると安心するための存在として描かれてはいないか。障害者の描き方・描かれ方の背景に、無意識の差別意識があるのではないか。こうした障害者によって健常者が消費するために提供される感動のことを“感動ポルノ”と表現し、大きな反響を呼びました。「マスメディア批判」的な意味合いで騒いだ人もいたかもしれませんが、やはり、“無自覚な差別意識”に気づいた人たちもたくさんいたと思います。バリバラはバリアフリー・バラエティーの略ですから、“バリア”とはなにかについて問うことは、番組の根幹に関わることです。バリアとは「障害」あるいは「障壁」のことです。最近、「障がい者」と表記されることが多くなってきましたが、バリバラでは「障害」で統一しています。それは、「障害」とは、障害者に貼り付いているものではなく、社会の側にあるものだという考え方からです。つまり、「立って歩けない」ことが障害なのではなく、「車いすで行けないところがある」ことが“バリア＝障害”なのだと考えるのです。

考えてみれば、この社会は、多数者(マジョリティー)が使いやすいようにデザインされていて、多数者の側にいる限りは、その利便性は“空気のように”無意識に享受できているわけです。ところが、足が動かない、手がない、目が見えない、など少数者にとってはバリアだらけになってしまう。「共生社会」というものを実現していくためにはどうすればよいのかと考えたとき、いくら障害のある方が頑張っても乗り越えられないバリアがあり、むしろ社会(多数者)の方がバリアを下げていくことを頑張っていかなければならないのではないかと思います。物理的なバリアだけでなく、社会のシステムや考え方などにも多くのバリアがあります。マイノリティー当事者の訴えに耳を傾けることで、多数者の側にいる私たちが彼我を隔てる“バリア”に気づき、改善に取り組むならば、障害者が必要以上に頑張らなくてもいいことも、たくさんあるように思います。

もともと、障害者をテーマに番組を作ってきたのがバリバラでした。2016年からは、障害者に限定せず、生きづらさを抱えているすべてのマイノリティーの人たちの“バリア”について考えていく番組としました。多数者にとって使いやすいようにデザインされた社会は、いわゆる障害者だけでなく、性的少数者にとっても、日本語の読み書きができない人にとっても“バリア”だらけです。ある場面では、日本国籍がないことや女性であることさえ、“バリア”になってしまう。そうした“バリア”の一つ一つをテーマに、バリアフリーな社会、ほんとうの意味での共生社会を考えていきたい。そうすることで、一つ一つの「他人事」を「自分事」として考えられる社会に少しでも近づけていければと思っています。

こうしたなかで誕生した企画の一つに『LGBT 温泉旅』というものがあります。タレントのはるな愛さん(トランスジェンダー、性別適合手術済みだが戸籍は男)や、バリバラでおなじみのベギー・バギーさん(ゲイ)、万次郎さん(手術せず、戸籍も女のまま、トランスジェンダー)といった人たちが登場。男湯と女湯に分けられた温泉で、どちらに入ったときの違和感を試してみるという企画です。見た目だけで分けてみたり、戸籍上の性別で分けてみたり、性的志向で分けてみたり、性自認で分けてみたり…。しかしながら、結論や答えはありませんし、誰もが納得のできる温泉のあり方などあるのかと改めて考えさせられました。

この社会で、どれくらいの割合で性的少数者がいるかという、5~10%、40人学級だと最低2人はいる計算になります。つまり、どここの学校にも、どここの会社にも、どここの町内にも「LGBTなど」の方はいる。でも、安心できない環境の中で、多くの人たちがカミングアウトせずに、そして時に不安を抱えながら生きているわけです。この社会で暮らす私たちの想像力が追いつかないために、誰にとっても安心・安全な場所をつくれないうるのだと思います。しかしながら、自分はヘテロ(異性愛者)だと思っている人たちも、LGBTなどに分類されると思っている、あるいは分類されている人たちも、明確な境目があるわけではなく、誰もがグラデーションのなかにいるのかもしれない。ほとんどの人は、幼い頃から「男らしさ」「女らしさ」のような価値観を植え付けられ、バイアスを受けた存在です。性的少数者を考えることは、実は、自分はマジョリティーだと思っている人にとっても、さまざまな呪縛から解放されることなのかもしれません。

「LGBT」の概念と同じく、「障害者」や「健常者」の概念についても、ここからここまでが「障害者」あるいは「健常者」というような線引きは明確にできるわけではないと思います。「障害」というものが社会の側にあるとしたら、社会の側が変化していけば、おのずとそのボーダーラインも変化してくる。

また、老いれば、多くの人は、障害者となっていくものです。障害者の「障害(バリア)」は、いつか誰もがぶつかるかもしれない障壁であり、「他人事」ではなく「自分事」として考えるべきものなのだと気づきます。

最近、バリバラについて、褒めて下さる方々から聞く言葉に、「タブーに挑戦している」というものがあります。なぜそう思われているのかをお聞きすると、『障害者のセックスの悩み』などを大まじめに取り上げてきたことなどを挙げられることがあります。でも、これはそもそも、タブーにしていること自体が問題なのではないか、とも思います。

家庭や特別支援学校などで障害者の性教育を行うことについては、なかなか難しいという声もあるかと思えます。しかし、障害のある人が、だまされたり、社会で居場所を見つけられずに性風俗に流れていくケースが少なくないと指摘されている。そうしたことを考えたとき、教育の場で、正しい性知識を身につけていくことも大切なのではないか、とも思います。こうしたテーマはこれからも取り上げていきたいと考えています。

何度も犯罪を繰り返してしまう『累犯障害者』と呼ばれる人たちのことも取り上げました。刑務所入所者には知的障害など何らかの障害のある方が4分の1程度いるといわれています。実際に、生きていくための必要に迫られて軽微な犯罪を繰り返し、何度も刑務所と娑婆を行き来してきた人たちに、スタジオに来てもらい、一緒に考える企画を制作しました。

その際、取材先の生い立ちから、現在までを取材。裁判資料などを掘り起こしていくと、子どものときに「知的障害がある」と診断されながらも、療育手帳を持たず、そのまま社会に放り出されてしまう。人間関係の問題などから、仕事も上手くいかず、野宿生活を続けては、食い逃げや弁当の万引きなど軽微な犯罪で逮捕・投獄を繰り返してきたことがわかってきました。それは、これまで警察や検察、裁判所、刑務所などで多くの人たちに出会いながら、障害者福祉の支援につながるができなかったことを意味しています。適切なサポートがあれば、どれだけ自分らしく幸せな人生が送れていたかもしれないと考えると、なんともいたたまれない気持ちになります。どんな支援が必要なのかを考え、少しでも状況を変えたいと考えました。これも「タブー」に挑戦しているつもりはあまりありませんが、「過去に“犯罪”を犯した人を一律にテレビに出すべきではない」などと、「タブー視」してしまっただけでは、「当事者の声を聞いて一緒に考える」という最も大切なことができなくなってしまいます。

『薬物依存』の問題を考えるにあたっても同様です。元タレントの田代まさしさんに御出演いただき、当事者でなければ語れないしんどさを、どんよりと重たくなってしまわないバリバラっぽい演出でお話いただきました。ところが先日、田代さんがまた逮捕されたとのニュースが飛び込んできました。バリバラに出演してもらったことを非難する声もあります。しかし、「また同じ過ちを繰り返してしまうかもしれない。依存症とはそういうものだ」と番組のなかでも話していましたし、薬物依存の当事者として、薬物のほんとうの恐ろしさを語る希有な存在として御出演いただいたことは間違っていないと考えています。今後、あらためて薬物依存の問題を考える番組の制作をしたいと思っています(12月12日放送)。

少し話を戻します。私は1990年代に学生時代を過ごしましたが、その頃は、家や入所施設を出て、アパートなどで自立生活を行おうとする「重度」障害者の介助は、ボランティアが支えなければなりませんでした。障害者の日々の生活も綱渡り、ボランティアを中心的に担った人の負担も大変重いものがありました。それが、やがてヘルパー代が公費から支払われるようになり、余暇を表現活動などに使う人たちも登場。バリバラという番組が誕生できたのは、こうした世の中の変化があつてのことだったのではないかとも思っています。

少しずつでも世の中は進んでいる、そう思っていた私たちが冷や水を浴びせられたのは、2016年7月のこと。相模原市の障害者入所施設で入所者19人が殺された「相模原障害者殺傷事件」でした。逮捕されたのは、元職員の男、「障害者には生きていく価値がない」と主張していたことが報じられると、インターネット上で、容疑者の主張に共感する声が多数あがりました。このときは、バリバラに対しても、容疑者の主張に共感する声がいくつも寄せられ、驚きました。メールをくれた人に会って話を聞きたいと返したところ、一人だけ、取材を受けてくれた人がいて、番組コメンテーターの玉木幸則さんと対談してもらいました。そこで、彼が主張したのは、「自分でお金を稼げない人が生きていく意味があるのか」ということでした。

事件が起きたとき、日本の障害者運動において先駆的役割を果たした「青い芝の会」の横田弘さん(故人)の著書を読み直しました。障害児の将来を悲観した親による殺害事件が相次いだことを受け、1970年代末の著書『障害者殺しの思想』のなかで、横田さんはこう記しています。

「何故、障害者児は殺されなければならないのだろう。

なぜ、障害者児は人里離れた施設で生涯を送らなければならないのだろう。

何故、障害者児は街で生きてはいけないのだろう。」 当時、障害者児は家にいるか、さもなければ入所施設に入れられ、そこで一生を過ごすことが当たり前とされていました。しかし、障害者運動の成果として、自立生活をするための制度が整えられ、施設から地域へ、という流れも定着しつつあるように見え始めていたなかで起きた殺人事件。じつはこの社会はなにも変わっていないのではないかと愕然とした気持ちにさせられました。横田さんは、先ほどの問いの答えとして、「モノをどれだけ生み出すことができるか」という生産性が高いかが価値判断の基準で、「役に立たない人間は存在する価値がない」という人間観が根源的なものとしてあるのではないかと述べています。そういう意味では、もしかしたら、非正規雇用が一般化し、貧困と格差が拡大し続ける現代の日本社会、人間を“生産性”で差別する考え方は、かつて以上に強くなっているのかもしれない。

きれいごとあるいは建前としては、「差別はダメだ」ということを多くの人が言います。しかし匿名性が高く、誰でも発信ができるインターネットには、ある一定の人たちの本音が現れています。そして、「他人事だから何でも言っている」というような、どこかに「はけ口」を求めるような鬱屈した気分が現代社会に蔓延しているとも感じています。そして、それは誰に、いつ向かってくるのかもわからない類いのものです。たとえば障害者を見て、「あの人頑張っているよね」とか「あの人可哀そうだね」と、いくら同情を寄せてみても、それが「他人事」である限りにおいて、「共生社会」を実現することは難しいと思うし、各々が抱えている不安も解消されないでしょう。

一方で、私たちはいつでも誰でも、明日事故に遭うかもしれない、病気で寝たきりになってしまうかもしれない、死ぬまで「健常者」で生き続けることができる人は少ない。また、何らかの場面では、すでに誰もが生きづらさを感じているのではないか。だとすれば、「想像力の翼」によって、他人事を自分事として考えることは誰にでもできることで、誰もが誰もを支える社会は、そんなに非現実的なものではないかもしれないと思います。バリバラが目指したいこと、「みんなちがって、みんないい」、それは誰もが「他人事を自分事として考えることができる」、そんな社会のことだと思っています。

本日の研究発表などを拝見させていただき、向日が丘支援学校は、「共生社会」実現のために、これまでお話しさせていただいたような、障害のある人が自立し、自分らしい生き方を手にしていく、という課題に、正面から取り組まれているのではないかと改めて感じました。今日は『バリバラ』という番組をとおして、様々な角度からお話しさせていただきました。今後ともよろしくお願ひ申し上げます。長時間お付き合いいただきましてありがとうございました。